

目的 筆者らは昨年、老人男女(60歳以上)の勤労観について実態調査を行い、男女別、年齢別の分析結果および京阪地区では学歴別、関東地区では学年との比較結果を本誌会において報告した。本報はさらに両地区を統合して、職業の有無別、家族形態別(核家族と拡大家族、配偶者の有無など)による老人の勤労観の特質を明らかにしようとするものである。

方法 京阪地区は昨年の調査票にもとづき男女245名の解答結果を用い、関東地区は千葉県老人大学生男女296名の調査結果を用いた。調査時期は55年1月～9月である。

結果 職業の有無別では、有職者は仕事・勉強に生きがいを感じている人が多く、無職者は趣味などに生きがいを多く感じていた。また有職者は生活は苦しくても努力すべきと考え、働くならば人より多く働き、仕事を選ぶならば、ある程度能力が生かして収入の多い仕事をと考えている人が無職者より多いという違いが出た。

家族形態別では、核家族の老人は趣味や自己向上に、拡大家族の老人は子や孫の成長に生きがいを感じ、勤勉および余暇の項目にも核家族の老人の方がより能動的な傾向がみられた。次に配偶者の有無別では、3項目を除くすべての項目に有意差が認められ、まず、有配偶者は生きがいを家庭に、無配偶者は人とのつき合いや信仰にこれを求める傾向のあることが分った。また有配偶者は勤労意欲や欲求もより強く、働くことに對しても、仕事の選択や勤勉などについても、余暇の活用についても種々の傾向がみられたが、無配偶者の方はすべてに消極的で、特に意志表示を明白にしない者が多かった。